

## 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促す学習指導

著者	奥 俊明, 中原 大士, 浜崎 昇平
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	28
ページ	273-278
発行年	2019-03-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/00030588">http://hdl.handle.net/10232/00030588</a>

# 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促す学習指導

奥 俊 明 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

中 原 大 士 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

濱 崎 昇 平 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Learning instruction to promote the deep learning that let a molding-like viewpoint, way of thinking act

OKU Toshiaki, NAKAHARA Daishi and HAMASAKI Shohei

キーワード：造形的な見方・考え方、造形的な視点、めあて、学びの過程の振り返り

## 1. 造形的な見方・考え方を働かせた深い学び

### 1.1. 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びとは

図画工作科の学習において、子どもが「～をつくりたい。」「友達の作品も見てみたい。」という表現や鑑賞への思いをもち続け、感性や想像力を働かせながら、豊かに表現や鑑賞を行うことを通して図画工作科における資質・能力を育てることができると考える。豊かに表現や鑑賞を行うとは、子どもがただ漠然と活動するのではなく、材料や作品、出来事などを形や色などの造形的な視点で捉え自分のイメージに生かしたり、作品や材料、出来事のよさや美しさを感じた理由を明らかにしたりしながら、表現や鑑賞を連続・発展的に行うことであると考え。このような学びを「造形的な見方・考え方を働かせた深い学び」とし、以下のように定義する。

子どもが表現や鑑賞への思いをもち、表現や鑑賞活動を通して、感性や想像力を働かせ、対象や事象を造形的な視点で捉え、よさや美しさを感じた理由を明らかにしながら、さらに造形的な視点を広く深く捉え、自ら表現や鑑賞を連続・発展的に行う学び

造形的な見方・考え方とは、学習指導要領解説図画工作科編では「感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくり出すこと」と示されている。上記の「造形的な見方・考え方を働かせた深い学び」の下線部分が、造形的な見方・考え方を働かせて思考している姿に該当する。この造形的な見方・考え方を基に感性や知性を融合させながら対象や事象を捉えることができ、図画工作科の資質・能力の育成につながると考える。

そこで、造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促すために、造形的な見方・考え方を働かせた思考の様子を表現や鑑賞の場面で整理することで、より具体的な学習指導を行えると考え、これまでの実践も踏まえ、表1のように整理した。

【表1 表現や鑑賞の場面で造形的な見方・考え方を働かせて思考している様相】

	どのような視点で		どのようにして考えるか
	形	色	
鑑賞する際に見方・考え方を働かせて思考する場面	大小，長短，中心と周り，重なり，奥行き，動き，組合せ，バランスなど	単色，重色，混色，明暗，色の組合せ，鮮やかさなど	・比較し共通点や差異点を見いだす。 ・よさや美しさを感じる理由と関係付ける。
表現する際に見方・考え方を働かせて思考する場面			・捉えた特徴と，自分のイメージを関係付ける。

鑑賞する際には，例えば，「この作品の方がカラフルだな。」と，色の視点を基に，材料や自他の表現を比較したり，「友達の車は，色がカラフルで楽しいな。」と，よさや美しさを感じた理由と造形的な視点を関係付けたりしながら特徴を捉える姿が想定される。

表現する際には，例えば，「宇宙に行く乗り物だから，星のように金色の模様を車体につけよう。」と，材料や自他の表現と向き合い，造形的な視点と自分のイメージを関係付けて自分の表現のイメージをより豊かにする姿が想定される。

このように造形的な見方・考え方を働かせて表現や鑑賞を行うことで，「この材料にはこんなよさがある。」「こんな工夫をすると面白い表現ができるな。」と，材料や表現の意味や価値をつくりだすことにつながると考える。

また，造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを行う学習過程を表すと，図1のようになる。

「思いをもつ・見通す」過程において，子どもは参考作品等を基に題材と出合う。その際，これまでの経験上獲得してきた造形的な視点を基に，感じたことを交流し合い，表したいテーマや題材のめあてについて話し合い，活動の見通しをもつ。

「思いを表現する」過程において，造形活動を通して，材料や自他の表現を鑑賞してよさや美しさを捉えたり，自分のイメージと造形的な視点を関係付けて表現したりする。その際，漠然と感覚的に理解していた造形的な視点を体験的に理解したり，新たな造形的な視点を理解したりしながら造形的な視点とイメージを関係付け，イメージを明確化する。そして，このように広く深く捉えた造形的な視点を基に，さらに高まった表現や鑑賞への思いのもと，表現や鑑賞を繰り返しながらより豊かになったイメージを表現していく。

「思いを味わう」過程において，これまで捉えてきた造形的な視点を基に互いの表現や作品を鑑賞し，よさを認め合ったり，活動を振り返ることで，材料や表現などの意味や価値を実感し，自分の学びや変容を自覚したりする。



【図 1 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びをする子どもの姿】

## 2. 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促す学習指導のポイント

### 2.1. 造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促す学習指導

造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを促すために、活動のめあてに着目した。活動のめあては、子どもの問いに含まれる造形活動への意欲や課題意識を基にした思いを具現化したものであり、「題材全体や毎時間のめあて」、「一単位時間の中の活動のめあて」がある。このようなめあてを、造形的な見方・考え方を働かせた深い学びの過程に合わせて、子どもの表現や鑑賞への思いに沿ったものにしていくことが大切であると考え。なぜなら、子どもの思いが各過程を通してつながり、造形的な視点を豊かに捉えながら高まることで、「形や色を工夫してもっとつくってみたい。」や「〇〇をつくるには、どんな工夫をすればいいだろう。」といった造形的な見方・考え方を基にした思いとなり、豊かな造形活動の原動力になると考えるからである。

また、子どもの思考を明確化した昨年度の研究において、造形的な視点を見いだしイメージとつなげる指導方法が重要であることが明らかになった。造形的な見方・考え方を働かせる際も同様の思考の流れがあり、これまでの指導方法の充実を図ることは造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを実現するための有効な指導方法であると考え。

そこで以下を学習指導のポイントとして設定する。

- 1 表現や鑑賞への思いがつながり、高まる活動のめあての設定
- 2 造形的な視点を見いだし、自分のイメージとつなげる指導方法の充実

### 2.2. 表現や鑑賞への思いがつながり、高まる活動のめあての設定の基本的な考え方

表現や鑑賞への思いは、各学習過程での材料や表現といった対象や事象との出会いやそれらに直接働きかけることによって生まれるものである。その際、子どもが、造形的な視点を捉え、造形的な見方・考え方を働かせながら表現方法などを思考し、表現や鑑賞への思いをさらにつなぎ、高めていく必要がある。

そこで、表現や鑑賞への思いを基に、造形的な見方・考え方を働かせた深い学びを実現するため

に、「活動のめあて」を、以下の観点で設定する。その際、題材で育む資質・能力を、発達の段階や系統性などから明確にしておく。

① 見いだされる造形的な視点の設定

題材に含まれる造形的な価値や題材で育む資質・能力を基に、参考作品や材料、用具・場所などの対象や事象から見いだされる造形的な視点を設定し、整理する。

② 造形的な見方・考え方を働かせた子どもの思考の具体化

前頁図1の「造形的な見方・考え方を働かせた深い学びをする子どもの姿」に沿って、題材の内容を関連させながら、各学習過程での表現や鑑賞場面における造形的な見方・考え方を働かせた子どもの思考を具体化する。

③ 各学習過程で生まれる子どもの思いの想定

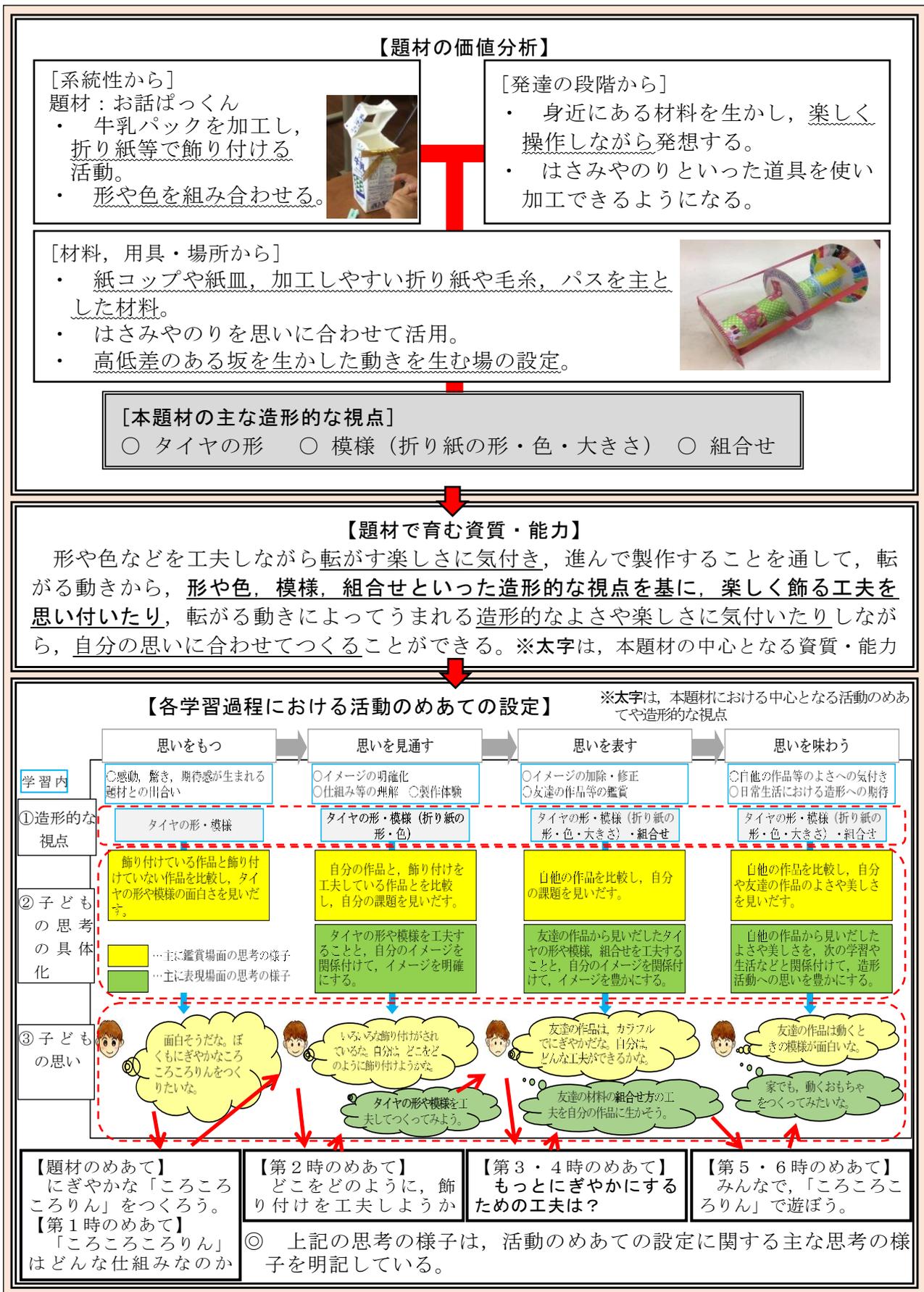
①・②を基に、表現や鑑賞を通して生まれる子どもの思いを想定する。そして、子どもの思いがつながり、高まる活動のめあてを見いだす。

具体的には、「～をつくろう。」といった自分の思いやイメージを表現しようとする思いがつながり、高まる活動のめあてや、「～を工夫するにはどうすればいいか。」といった表現する際に見いだした課題を追求しようとする思いがつながり、高まる活動のめあてが考えられる。

また、実際の授業において、子どもが必要感をもって活動のめあてを認識できるようにするために、「参考作品の提示」や「発問」、「試しの活動の場の設定」などを通して、子どもの表現や鑑賞への思いを引き出しながら活動のめあてを設定していく。

### 2.3. 表現や鑑賞への思いがつながり、高まる活動のめあての設定の具体例

第1学年「ころころころがれ」(転がるものをつくり、装飾する工作の題材)における、表現や鑑賞への思いがつながり、高まる活動のめあての設定について一例を示す。



【図2 表現や鑑賞への思いがつながり、高まる活動のめあての設定の具体例】

## 2.4. 造形的な視点を見いださせ、自分のイメージとつなげる指導方法の充実の基本的な考え方

これまでの研究において、子どもが造形的な視点を見だし、自分のイメージとつなげることができるよう、「発問や板書」「教材、教具、題材名」の工夫といった指導方法を実践してきた。その充実を図る中で、子どもが造形的な見方・考え方を働かせた学びの過程を振り返ることが大切であると考えた。なぜなら、学びの過程を振り返ることで、自分の成長やよさ、可能性などに気付き、次の学習や生活・社会の中の対象とかかわる際も、造形的な見方・考え方を働かせながら主体的に思考し、創造的に表現することができるようになると考えるからである。

そこで、造形的な見方・考え方を働かせた学びの過程を振り返らせるために、活動のめあてや工夫するポイントを視点に振り返らせたり、実際に表現する際にその過程に沿って試行錯誤させたりして、子どもが学びの過程を自己認識できるようにする。

## 2.5. 造形的な視点を見いださせ、自分のイメージとつなげる指導方法の充実（学びの過程の振り返り）の具体例

学びの過程	試しに粘土を操作しながら、「工夫するポイント」（造形的な視点）を見付けたり、自分のイメージを膨らませたりする学びの過程。	
<b>学びの過程の振り返り</b>		<b>学びの過程を実感する場</b>
 <p>～発問を通して～</p>	<p>どうして、最初の粘土の塊が、題材のめあてのように、楽しい作品に大変身したのかな。</p> <p>粘土と遊んで、面白い形を見付けられたからだよ。</p>	 <p>～試行錯誤の場～</p>
余分な粘土を準備し、イメージをふくらます際に、どんな形や大きさを工夫できるか考えられる場を設定した。		

【図3 学びの過程を振り返らせるための働きかけの具体例】